

# 国文研ニュース

No.57 SUMMER 2020



『富樫』

## 目次

### ●メッセージ

古典のある人生を……………谷 知子 1

### ●エッセイ

調査の醍醐味……………齋藤 希史 2

富山の思い出 山田孝雄文庫のことなど……………綿拔 豊昭 4

### ●トピックス

廣瀬資料館(大分県日田)の総合的調査を開始……………太田 尚宏 6

ないじえる芸術共創ラボ2019年度成果発信・2020年度特別展示について……………有澤 知世 7

共催フォーラム第3回「東アジアにおける知の往還—都市という舞台—」……………齋藤真麻理 8

社会連携推進室「ぶらっとこくぶんけん」地域資源発掘型実証プログラム事業

古典の森モニターツアー① 香道体験と国文研ガイドツアー……………山下 則子 9

社会連携推進室「ぶらっとこくぶんけん」地域資源発掘型実証プログラム事業

古典の森モニターツアー② 江戸スウィーツ お菓子教室と和本づくり体験……………糸 汐里 9

マレガ文書解読のためのくずし字教材・教授法の開発と交流……………大友 一雄 10

小林健二名誉教授、観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞!……………恋田 知子 10

一冊対談集 クリエーターと語るこの国の古典と現代

第3回 小倉ヒラク×ロバート キャンベル「酒は百味、人面のごとし」……………西村慎太郎 11

令和元年度くずし字講座……………糸 汐里 11

シンポジウム「文学と化学分析から見た、日本の食文化における断絶と継承—古代、江戸から現代まで—」

……………入口 敦志 12

基幹研究「地方協創によるアーカイブズ保全・活用システム構築に関する研究」……………西村慎太郎 13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況……………14

## 古典のある人生を

谷 知子 (国文学研究資料館運営委員、フェリス女学院大学文学部教授)

国文学研究資料館(国文研)の活動は、研究活動、調査収集、国際事業、大学院教育、「ぶらっとこくぶんけん」と多岐にわたる。その他のプロジェクトも数多く展開されており、なかでも日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画(以後、歴史的典籍NW事業)は、研究者にとってこの上ない恩恵である。文学だけでなく、異分野も含めて構築された古典籍データベースには多彩な検索機能もあり、画像の再利用も可能である。2023年度(令和5年度)には30万点の画像データが作成される見込みで、新型コロナウイルス感染が流行した近時の状況下でも在宅のまま利用でき、改めてその価値が再確認されている。

また、研究活動の拠点としての役割だけでなく、古典文学や文化の発信、普及にも力を入れている。例えば、多摩地域における学術・文化の発展に関する事業を継続的に実施するために、国文学研究資料館を中心に構成された「ぶらっとこくぶんけん」、国文研で培ってきた古典籍を基盤にして、研究者コミュニティの外にネットワークを開放する「ないじえる芸術共創ラボ」など、地域社会さらには広く世界に向けての発信が行われている。

このたび大きく改訂された高等学校新学習指導要領「国語」には、共通必修科目として「言語文化」が新設された。この科目では、知識を身につけるだけではなく、その知識を表現すること、創造的に「書くこと」が重視されている。具体的な指導例として、「本歌取りや折句などを用いて、感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり」と、知識を「書くこと」に生かしてゆく授業が提案されているが、創造的な表現は「書く」こと以外に豊かな広がりがある。全く異なるジャンル、日常生活の嗜好品に、古典や和歌がリメイクする試みも古典文学の知識を表現する一つの試みである。

例えば、古典文学と飲食とのコラボレーションである。国文研は、2017年三越伊勢丹と知と食のコラボレーションを企画し、江戸の味を江戸の版本から引き出し、食品フロア各店舗で商品化した。この企画は、先の歴史的典籍NW事業の一環で、古典籍からレシピを選び出し、翻字、現代語訳を付けたという。例えば、「守貞謄稿」から「星ぞめ半べん」、「万宝料理秘密箱」から「吟醸粕漬玉子」、「豆腐百珍」から「よせ豆腐」のように、典拠と共に心のタイムトリップを楽しむことができる。古典文学の中でも、『百人一首』

は古くより食品の世界に取り入れられてきた。「小倉あん」は、断面が鹿の斑模様に見えることから、鹿が連想され、鹿といえば紅葉(花札などにも見える組み合わせ)、紅葉といえば小倉山(二六番)と続き、いつしか小倉あんと呼ばれるようになったという。竜田揚げは、『百人一首』一七番にちなみ、みりん醤油で下味をつけた材料を油で揚げて赤くする料理法を、竜田川を流れる紅葉に見立てたのである。近年では、京せんべいおかし専門店「小倉山荘」は、『百人一首』の歌にちなんだお菓子を製造し、ヒットしている。また、滋賀県大津市の琵琶湖ホテルは、『百人一首』を題材にしたカクテルやスイーツビュッフェを企画、提供し、話題を集めている。

稿者もここ数年、学生による『百人一首』を題材にした商品開発に取り組み、2018年度は『百人一首』の最中「浜恋路」(横浜元町・香炉庵)、2019年度は『百人一首』のお茶「かがりびとしらなみ」(シンガポールの企業プロビドール社)を開発、実店舗やオンラインで販売された。2020年度は、横浜市の小学校3校と協定し、学校給食で『百人一首』をデザインしたメニューを提供する予定である。和歌の撰定から始まり、和歌の心をどのように飲食の世界で表現するか。例えば、白い生クリームを雪に、型抜した人参を紅葉に見立てるなど、まさに和歌の世界の「見立て」の手法を用いた商品化を行っている。

こうした古典文学を素材にした商品開発は、企業や公共団体との連携が必須である。今後もし可能であるならば、国文研が橋渡的な役割を担ってくれるとありがたい。実際のプロジェクトの実践は、企業・団体と大学等が担うので、紹介まででよいのだ。古典文学を素材にした商品開発を希望しながらも、どこにアクセスすればわからないという企業・団体もあると聞いている。

古典文学、日本文学の未来は楽観視できるほど甘くない。その魅力を自明のこととして研究、教育を行える時代ではもはやないだろう。古典文学に関心のない層や小さなお子さんにも古典文学の魅力を伝える活動は、今後ますます必要とされるのではないか。

## 調査の醍醐味

齋藤 希史まれし（元国文学研究資料館資料分析専門部会委員、東京大学大学院人文社会系研究科教授）

『国文研ニュース』では、54号から、調査収集にかかわるエッセイが資料分析専門部会委員によって連載されています。この文章はその4回目ということになりますが、これまでのエッセイを拝読しますと、それぞれのご専門にふさわしい深みに嘆息すること頻りで、なるほど実地調査というものはこのようにして先生方の学問の血肉となっているのだと感じ入ります。

その一方で、国文学研究資料館の事業としての調査活動は縮小されています。かつての館員として、また調査員として、そして部会委員をつとめた者としても、正直、残念に思います。もちろんそれには理由があり、新しい方針に意味があることも承知していますが、そうした状況の中で自身が国文研とかかわる中で経験した調査収集事業について書くとなれば、やはり逡巡するところがあります。かつての恵まれた経験について、いまはその機会が減りつつあるのを知りながら語る。語の本来の意味において、忸怩たるものがあります。

ただ、規模が縮小されたからと言って、調査そのものがなくなったわけではありません。国文研の事業という枠組みでないところでの調査も当然ながらあります。何らかのかたちで大規模な調査が企画実行されることもあるでしょう。私のささやかな経験についてここに記すことが、他山の石にならないとも限りません。

私が国文研の文献資料部第四文献資料室（第四室）に助教授として着任したのは、2000年4月でした。第四室は、近代文献を扱うセクション、室長は谷川恵一さんでした。国文研はがんらい古典籍、いわば『日本国書総目録』の範囲の書物についての調査収集研究を行なうことがまず優先されましたから、第四室は後発です。設置は1998年、国文研の創設から四半世紀が経っていました。着任時にはまだ手探りのことも多く、本格的な軌道に乗りつつあったころ、としてよいでしょう。

近代文献と言っても、対象となったのは基本的には明治期の文献です。ご承知のように、明治期は書物の内容はもとよりその形態にも大きな変化が生じた時代です。近世に大きく発展した版本の様式はなお根強くありつつも、輸入された洋装本を手本とした書物も陸続と生まれる。全体の流れとしては近世和装本から近代洋装本へということになりますが、その過程ではさまざまなかたちの本が生まれ、

また消えて、近代日本の書物の世界が形成されたわけです。過渡期として片づける人もいるかもしれませんが。しかし過渡期というのはダイナミックでたいへんおもしろいものです。ほとんど混乱に近いような試行錯誤のうちに、安定期では隠されているような生成のメカニズムが見える。それは、書物とは何かを考える上で、重要な示唆を与えてくれます。しかしそれを感知するためには、まず、この時期にどのような書物が生まれていたのかをつぶさに把握する必要があります。第四室の課題は、そうしたさまざまなかたちの書物をどのように調査し収集するか、そしてその全体の見取り図をどのように作るか、ということにあると私は受け止めました。伝統的な書誌学では正面から取り組まれてこなかった領域です\*。

近代文献の調査は、従来の古典籍調査で行なわれていた調査カードをベースに項目や様式を明治期の文献に合わせて調整し、さらに手書きのカードではなくノートパソコンにあらかじめインストールしたデータベースに入力する方法が採用されました。デジタルカメラで撮影した画像もデータベースに保存します。調査データから収集計画を作る上での集計が格段に楽になりますし、データが集積すれば、同一もしくは類似の文献に出会ったさいに参照することができるという利点があります。ノートパソコンにインストールされたデータベースには、前年度までの調査で得られた文献の基本データも入っています。調査点数をかせいで近代文献の調査収集事業を軌道に乗せることが急務でしたから、デジタルによる効率化はしかるべき道筋だったと言えるでしょう。

とはいえ、調査のたびにノートパソコンやデジタルカメラなどの機材を梱包して調査先に送り、調査が終了すれば調査員がそれをまた梱包して調査先の担当の方に預けるという手間はあります。データベースの扱いに習熟するまでは、紙のカードに手書きしたほうが早いということもありました。紙ならもっとたくさんカードが取れるのにという声も聞きました。国文研の文献調査は、基本的にはマイクロフィルム撮影による収集の前段階として位置づけられていましたから、近代文献の調査も同様であるとするなら、

\* 書誌学の見地からみた国文研の事業と第四室、さらに後述のデジタル調査の位置づけについては、堀川貴司「日本古典籍の書誌学的アプローチ」（『情報知識学会誌』18-4、2008）に簡にして要を得た記述があります。



## 富山の思い出 よしお 山田孝雄文庫のことなど

綿拔 豊昭（国文学研究資料館学術資料委員会委員長、筑波大学図書館情報メディア専攻長；教授）

令和2年3月25日、「北國新聞」夕刊の一面記事は「大関朝乃山が誕生」でありました。記事には「富山県出身では太刀山（後の横綱）以来、111年ぶりの大関となった」とあります。かつて富山女子短期大学に勤めておりましたおりに住んでおりましたのが、「太刀山出生之地」と刻まれた石碑から徒歩10分ほどのところにありました miki house という集合住宅です。板垣退助よりおくれたとされます四股名「太刀山」は、立山に由来することはいうまでもないでしょう。この立山を愛しましたのが、富山県出身者として初の文化勲章を受け、富山市名誉市民となりました山田孝雄（1875/8/20～1958/11/20）であります。富山女子短期大学の附属図書館では、私がつとめておりましたおりに、富山県出身者である国語学・国文学研究者として山田孝雄の著作を収集しておりました。山田孝雄は立山を

国めぐり山々見ればこしの立山比なきかなと詠じております。

山田孝雄の墓地は、「太刀山出生之地」から自動車でも20分ほどの呉羽山五百羅漢長慶寺にあります。晴れた日に墓地のあります呉羽山からながめる立山は絶景としかいいようがありません。なお、富山県以外の国文学研究者の方々にはあまり知られておりませんようなので申し添えますと、現在、長慶寺には「志留丸（人麻呂）塚」と「筆塚」が残るばかりですが、かつては石見国の人麻呂神社の社殿の土を移して設けられた祠がありました。富山藩第八代藩主前田利謙の生母自仙院佳子がこの寺で「桜谷八景」の歌を詠んでおります（このあたりは「桜谷」といわれていました）。また、呉羽山には、富山藩の連歌に関係の深い於保多神社のある富山市太田出身で、「万葉集」の研究などで知られました高崎正秀の歌碑があります。いうまでもないでしょうが、越中は「万葉集」とかかわりが深く、「高岡市万葉歴史館」があります。

ところで、ネットワーク時代以前、資料調査にあたって大切なことの一つは人間関係であり

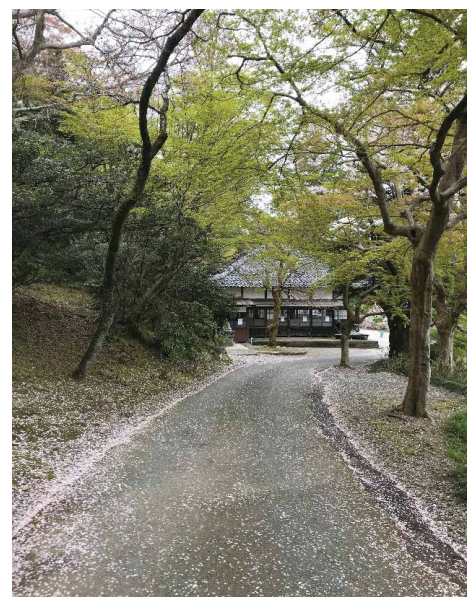
ました。山田孝雄の墓碑のあります呉羽山を下りますと富山県立図書館があります。かつて、ここの館長をつとめられた広瀬誠氏には郷土史について並々ならぬご教示を得ました。また私が国文学研究資料館の調査員としてのスタートをきったのがこの富山県立図書館であります。当時富山大学の教授でいらっしゃった稲田篤信先生にご指導を受けて初めてカードをとりました。参納哲郎氏をはじめ図書館職員の方々の御厚情で、図書館に所蔵されます、様々な分野にわたります、膨大な量の和本を調査させていただきました。またこの折に面識を得ました、当時司書であられた古沢氏には後に「高志の国文学館」開館の折の講演の便に便宜をはかっていただきました。その講演の折に、貴重な芭蕉の自筆をみせていただく機会を得ました。また同じく司書であられた太田久夫氏は、後に高岡市立図書館の館長になりました。今は高岡駅からつながっております「ウイング・ウイング高岡」の中にはありますが、かつては古城公園の中にあつた高岡市立図書館では、太田氏をはじめ菅原みどり氏ほか図書館職員の方々に、国文学研究資料館の調査カードをとるさいは無論のこと、資料調査などにも多くの便宜をはかっていただきました。富山県の図書館は「人気（じんき）」が良かったとつくづく思います。

むろん人気の良さは富山市立図書館も例外ではありません。

現在の富山市立図書館は、富山市ガラス美術館などが入居する複合施設「TOYAMA キラリ」（富山市西町）にあり



山田孝雄之墓：2020年4月、織田朋子氏撮影



桜舞う長慶寺：2020年4月、織田朋子氏撮影

ます。そこに移転する前、すなわち昭和四十五年に新設されました富山市立図書館は富山市丸の内にありました。新設にあわせて翁久充が寄贈した図書からなる「翁文庫」がありましたが、私が富山に来ましたころには和本については未整理なものがありませんでした。後に「翁久充文庫」としてまとめられ、目録が刊行されています。その目録発行以前、元市立図書館長であった辻澤与三氏に細田館長を紹介していただいたおりに、和書のことが話題になり、細田館長よりそれを調査してよいという御許可を得て、通わせていただいたことがなつかしく思い出されます。

翁久充文庫として目録が刊行された平成8年、山田孝雄旧蔵書が寄贈されることになりました。旧富山市立図書館の一室に、ところ狭しと寄贈書が置かれておりましたことをよく覚えています。まず洋装本が整理されて目録が発行され、後に和装本が同じく整理されて目録が発行されました。「山田孝雄文庫」として専用の文庫室が設けられ、閲覧できるようになったのが平成11年のことです。旧市立図書館の6階に別置され、見事に整理された文庫室にはじめて入りましたとき、そして、そこで前田利保が一座した連歌懐紙等を見せていただいたときの感動が、今でもそのことを思い出すたびにたちあがります。

山田孝雄文庫の連歌資料等の調査をさせていただいたのは、移転後のことです。現在自分が勤務する筑波大学大学院を修了した職員が担当してくださいました(ちなみに、かつて勤務した富山女子短期大学や図書館情報大学の卒業生も富山市立図書館で働いていらっしゃるの、みっともないことはしないようにと、調査に行くたびに緊張します)。なお国文学研究資料館の画像データベースで、少なからずの山田孝雄文庫所蔵本をみることができますので、とりあえず内容を知りたいときは、それを利用させていただいております。

山田孝雄文庫全体が貴重なのですが、私の研究分野でいえば連歌資料が特に貴重で、他の図書館等には所蔵されないものが多くあります。山田孝雄の父である芳雄は、富山藩士の連歌師的な仕事もいたしたため、特に前田家領の地域資料として貴重な連歌資料が少なからずあります。

また孝雄は東北帝国大学に勤め、仙台で晩年を迎えたこともあって、仙台藩の連歌資料も収集しており、これも注目にあたいします。富山そして仙台は第二次世界大戦の折

の空襲で貴重な資料が多く焼失しておりますが、原爆のため皆無といってよいのが広島・浅野家の連歌資料です。その希少な資料も一点所蔵されており、これなどは近世連歌資料としてもっと注目されてよいと考えております。わたくし事で恐縮ですが、令和元年に上梓させていただきました『近世武家社会と連歌』(2019年、勉誠出版)では、山田文庫の所蔵資料を大いに活用させていただきました。

富山市役所前庭にたつ歌碑に次の孝雄の歌が刻まれています。

百千度くりかへしても説毎にこと新なり古の典

何度調査しても、新しい知見が得られる古典が、山田孝雄文庫には所蔵されております。地域の財産として大切にするとともに、さらなる活用をはかっていただきたいものです。

### (付) お知らせ

国文研では、2019年度より富山市立図書館の協力を得て、山田孝雄文庫所蔵古典籍のデジタルによる集中撮影を開始しています(財源は機構長裁量経費)。データの登載が済んだものから順次、「日本古典籍総合目録データベース」より画像公開を進めていきます。

また、富山市民の皆さまを対象として、来たる2020年10月2日(金)夜にロバート キャンベル館長による公開講演会を、翌3日(土)午後には綿抜豊昭先生と岡田貴憲先生、神作による「山田孝雄文庫セミナー」を開催する予定です。

\*新型コロナウイルスの感染状況によっては、開催を延期する可能性もあります。

(機構長裁量経費 WG 座長 神作研一)

## 廣瀬資料館（大分県日田）の総合的調査を開始

国文学研究資料館では、2019年度より5か年計画で基幹研究「十九世紀地域文化拠点の総合的研究—廣瀬家を中心として—」（研究代表者：入口敦志）を実施しています。

上記テーマの副題にある廣瀬家とは、豊後国日田（現在の<sup>こようたし</sup>大分県日田市）で幕府代官所の御用達・掛屋をつとめ、地域経済の中心的存在として活躍する一方、第6代当主久兵衛の実兄である廣瀬淡窓が私塾「咸宜園」を開くなど、教育・文化活動の面でも広くその名が知られた家です。廣瀬家歴代が遺した蔵書や歴史的文書は、現在、公益財団法人廣瀬資料館（先賢文庫）に保存されています。

今回の基幹研究では、廣瀬資料館のご協力のもと、同館所蔵の蔵書・文書群を素材に、漢学をはじめ、和学、和歌、俳諧などの文芸、思想、宗教、および近世後期から近代に至る地域での教育的役割、文化活動の背景となる地域での経済・社会活動のあり方など、多彩な分担者による学際的分析を行い、廣瀬家の文化的・経済的・社会的活動の総体を明らかにして、地域文化の「拠点」が果たした機能・役割を解明したいと考えています。

廣瀬資料館の資料のうち、文芸・思想・教育などに関わる蔵書類については、2018年に刊行された廣瀬貞雄監修 中村幸彦・井上敏幸共編『廣瀬先賢文庫家宝書詳細目録』（廣瀬先賢文庫発行）にしたがって、順次デジタルデータを作製し、国文研のデータベースから公開する作業を進める一方、「廣瀬八賢」と呼ばれる淡窓・久兵衛・月化・桃秋・秋子・旭莊・青邨・林外らの書簡を選んで表装した「手束」（軸装途中で未整理の状態）などの調査・分析を進めているところです。

経済・社会関係の文書は、同館で「廣瀬家文書」という名称で区分され、過去に九州大学九州文化史研究所や東京大学史料編纂所の手によって整理・目録化が進められていました。しかし残念ながら、この文書群は、文庫内の引戸式ロッカー14基や木箱・ダンボール箱などに雑然と収納されており、過去に作成された目録から個々の資料を容易に識別できる状態にはありませんでした。そこで今回の研究では、まず資料と目録とを照合して確認し、資料番号にそって適切な包材への装備を行うなど、今後の文書群の管理・活用を見据えた配架・保存措置から作業を始めています。

2019年10月より3回にわたって廣瀬資料館を訪問し、文庫内の温湿度の状態や配架状況などをチェックして、資料館の方々と“資料管理者が誰でも確実に出納・管理できる方法”を相談しながら作業を進めています。廣瀬資料館には、「家宝書」や「咸宜園蔵書」以外の「廣瀬家文書」だけでも3万点以上の文書・記録類があると推定されていますので、大変な作業ではありますが、過去から現在に至る地域文化の「拠点」に残された蔵書や文書類を守り、後世へと伝えていくための基礎的な作業として、一步一步着実に調査を進めていきたいと考えています。

（太田 尚宏）



未整理の「手束」類



雑然と置かれた文書



包材を用いて配架状況を改善

## ないじえる芸術共創ラボ 2019 年度成果発信・2020 年度特別展示について

国文学研究資料館では2017年度10月より「ないじえる芸術共創ラボ アートと翻訳による日本文学探索イニシアティブ」を進めており、アーティスト等を招聘し、古典籍を活用して新たな芸術的価値を創出するレジデンス・プログラムを実施しています。レジデンス・プログラムは、様々な分野で活躍するクリエイターを招き、古典籍に触れたり研究者とワークショップを行ったりすることで得た感性と知識を創作活動に活かしてもらうアーティスト・イン・レジデンス (AIR) と、翻訳家を招き、まだ広く知られていない古典文学作品について研究者とともに理解を深め、他言語に翻訳して世界に発信してもらうトランスレーター・イン・レジデンス (TIR) の2つの柱があります。

各 AIR・TIR の成果は、ないじえる芸術共創ラボの公式 WEB や SNS で公開しています。2019年度には、主に以下のような成果発信を行いました。

### 【山村浩二新作短編アニメーション「ゆめみのえ」完成試写会】

日本を代表するアニメーション作家の山村浩二さんは、江戸中～後期に活躍した絵師<sup>くわがたけいさい</sup>鋤形蕙斎が動植物・人物などを簡略な線で描いた『略画式』シリーズと、上田秋成『雨月物語』<sup>うげつものがたり</sup>「夢応の鯉魚」<sup>むおう りぎよ</sup>を原案とした短編アニメーション「ゆめみのえ」を完成させ、2019年8月23日には、東京都のユーロライブ (渋谷区円山町1-5) にて完成披露試写会を開催しました。

試写会では、山村さんの創作活動に伴走し続けた木越俊介准教授、日本語版語り部を担当した長塚圭史さん (同 AIR、劇作家・演出家・俳優)、英訳と英語版語り部を担当したロバート キャンベル館長も山村さんとともに登壇し、創作秘話について語り合いました。

試写会の様子は、動画や古典インタプリタ日誌で公開しています (<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/past/index.html>)。



右から、長塚さん、山村さん、  
キャンベル館長、木越准教授

### 【デジタル発 和書の旅「古典籍×〇〇ラボであう・うみだす・みとおすー」開催】

2019年10月5日、京都市のFabCafe Kyoto (下京区本塩竈町554) にて、若手 AIR の松平莉奈さん (日本画家) と梁亜旋さん (現代芸術家) の新作展覧会およびトークセッションを行いました。

松平さんは、黄表紙 (18世紀末に流行した大人向けの絵入読み物) の盛衰の在り方と形態にインスパイアされた日本画「作者の手の内夢の内」を、梁さんは絵巻「百鬼夜行図」の鑑賞方法や表現から想を得たインスタレーション作品「Ghostly」と平面作品「OOOBAKE!」シリーズを発表し、それぞれ古典籍のどのような点に注目し、どのように創作活動に活かしたのかについて、専門家を交えて語りました。

また、入口敦志教授は、凸版印刷 (株) が新たに開発したデジタルコンテンツ「和書ロード」を活用しつつ、古典籍の形態と内容との関係性について講義を行うとともに、糸汐里特任助教も交えて和紙と糸を使った「和本をつくるワークショップ」を行い、AIR とのワークショップの一端を会場で再現しました。イベントの様子は動画と古典インタプリタ日誌で公開しています。

なお「デジタル発 和書の旅」とは、凸版印刷 (株) と協同で行う出張型イベントのシリーズ名です。



右から、恋田知子准教授 (当時)、  
松平さん、梁さん、筆者



和本をつくるワークショップの様子

### 【『三度目の恋』完結記念座談会開催】

日本を代表する小説家の川上弘美さんが、『伊勢物語』をモチーフに執筆を続けていた連載小説『三度目の恋』の完結を記念し、プロジェクト開始当初より、川上さんの創作に伴走してこられた山本登朗先生 (関西大学名誉教授・京都光華女子大学名誉教授)・小山順子先生 (京都女子大学教授) をゲストにお招きして座談会を行いました (2020年3月2日、於吉祥寺第一ホテル 楓)。



座談会では、川上さんが小説の執筆をとおして、『伊勢物語』そして「業平」の魅力や、異なる時代の暮らしや価値観などに、どのように迫っていったのかが語られました。

座談会の内容は、公式 WEB ([https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/kawakami/sandome\\_taidan/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/kawakami/sandome_taidan/index.html)) よりご覧いただけます。

### 【ないじえるレポートの公開】

ないじえる芸術共創ラボの活動には、様々な専門分野の研究者による協力が不可欠です。プロジェクトに欠かすことのできない「専門知」や、AIR・TIR との共創をとおして研究者が考えたことについて、ワークショップやイベントで関わってくださった先生方が、「ないじえるレポート」として綴っています（公式 WEB にて公開 <https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/report/index.html>）。

### 【2020年度特別展示開催について】

2020年度冬に、プロジェクト成果を一堂に会した特別展示を開催する予定です（於国文学研究資料館展示室）。

さまざまな古典籍を源とし、AIR・TIR と研究者の共創によって生まれた新たな芸術表現をご覧いただくと同時に、多様な分野で活躍するクリエイターや企業にも参加してもらい、古典籍活用の事例を示すことで、古典籍を〈誰でも活用できる魅力的な文化資源〉としてご紹介します。（有澤 知世）



右から、小山先生、川上さん、山本先生、筆者

## 共催フォーラム第3回「東アジアにおける知の往還—都市という舞台—」

2019年10月18日（金）13時～16時半、国文学研究資料館において、当館と韓国・高麗大学校グローバル日本研究院との学術交流協定に基づき、フォーラム「東アジアにおける知の往還」第3回—都市という舞台—が共催されました。

今回は、鄭炳浩高麗大学校グローバル日本研究院長をはじめ、5名の研究者をお迎えして、鄭院長およびロバート キャンベル当館館長の開会挨拶に続き、齋藤真麻理の司会により以下の研究発表が行われました。

①渡辺浩一「首都圏水系と江戸・東京の水害」（国文研） ②金孝順「『京城日報』小説と近代都市京城の表象」（高麗大学校グローバル日本研究院） ③嚴仁卿「日本の伝統詩歌に描かれた大都京城の風土」（同） ④Guillaume CARRÉ「都市が主人公—パリと江戸のパノラミック・リテラチャーについて—」（École des Hautes Études en Sciences Sociales 社会科学高等研究院） ⑤兪在眞「日韓の西洋探偵小説受容における都市表象—エミール・ガボリオの『ルルージュ事件』を中心に—」（高麗大学校）

フォーラムでは、まず、都市を自然改造により形成された人為的自然と捉えつつ、江戸・東京の水害史が論じられ、最後は西洋探偵小説の受容の分析を通して、翻訳という営為についても思いを巡らせることとなりました。また、折しも2019年度の当館客員教授として、フランスからお招きしていたギョーム カレ氏（日本近世史）にご登壇頂けたことも大変難しく、多くの来聴者との活発な議論とも相俟って、充実した研究交流を実現することができました。本企画の実現には、高麗大学校の金秀美教授に格別のご高配を賜りました。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

なお、全3回のフォーラムの成果は書籍としてまとめるべく、現在、両機関で検討が進められています。どうぞご期待下さい。（齋藤 真麻理）



フォーラムの様子



当日、学術交流協定の更新の調印式も行われました

## 社会連携推進室「ぷらっとこくぶんけん」地域資源発掘型実証プログラム事業 古典の森モニターツアー① 香道体験と国文研ガイドツアー

2019年度より本格的な活動を開始した社会連携推進室では、2019年11月23日(土)、「令和記念!古典の森を体感する事業」と題する地域資源発掘型実証プログラムの一つとして、モニターツアー①を開催しました。これは、国文研での古典講義・展示解説と昭和記念公園内日本庭園「歎楓亭」での香道体験をセットにした内容のツアーです。地域資源発掘型実証プログラムとは、立川商工会議所、多摩信用金庫、株式会社JTB東京多摩支店の地域社会の企業と国文研が協力して行うプログラムで、モニターツアーの他、館長と各界著名人との対談企画「国文研カフェ」やスタンプラリー、ジャズと和歌披露との共演などを計画し、2019年度は東京都より約700万円の補助金を得て実施したものです。

モニターツアーへの参加希望者は、すぐに募集人数20名に達しました。当日はあいにくの雨天で、移動手段はレンタサイクルから貸し切りバスに変更されました。国文研での神作研一教授による『解体新書』などの古典籍に関するミニ講義、展示室で開催されていた「本のかたち 本のこころ」の古典の展示解説(糸汐里特任助教)も、一般の方々にわかりやすく配慮されたものでした。立川駅近辺での昼食後、午後は昭和記念公園に移動し、紅葉鮮やかな歎楓亭において当館博士研究員の武居雅子氏による香道体験が行われました。館長とともに伺った、香道師範である武居氏の香道紹介は興味深く明快であり、近寄りやすいイメージの香道を身近に感じられるものに生まれ変わらせました。

モニターツアーに関するアンケートでは、8割以上の参加者から「とても満足」という反応を頂きました。雨に濡れた紅葉の日本庭園とともに、2019年の最も美しい思い出となりました。ご尽力下さった全ての方々に感謝申し上げます。(山下 則子)



神作研一教授によるミニ講義



糸汐里特任助教による展示解説



武居雅子氏による香道体験

## 社会連携推進室「ぷらっとこくぶんけん」地域資源発掘型実証プログラム事業 古典の森モニターツアー② 江戸スイーツ お菓子教室と和本づくり体験

11月30日(土)、晩秋の晴天の下、地域資源発掘型実証プログラム事業の一つとして「古典の森モニターツアー②」を開催いたしました。第二回目は「江戸スイーツお菓子教室と和本づくり体験」で、午前は立川駅からほど近い国際製菓専門学校にて江戸時代のレシピを使ったスイーツづくりを体験し、午後は国文学研究資料館に場所を移し、江戸の和本づくりを楽しむという盛り沢山のツアーです。

江戸スイーツづくりでは、はじめに江戸期に刊行された『料理物語』の「牛蒡餅」、卵料理を特集したレシピ本『万宝料理秘密箱卯百珍』の「冷し卵羊羹」の本文を入口敦志教授が解説しました。次に全員エプロンとコック帽を身にまとい、いよいよ調理場へ。国際製菓専門学校の指導の下、まず料理書に記載された通りのものを、次に現代風にアレンジしたものを、それぞれ2通り作り、試食しました。企画に携わった入口教授と筆者も、各グループの人数の調整のため、お菓子作りに参戦。牛蒡餅の揚げ加減や、すばやく流し込む卵羊羹に苦戦しながら、無事に4品を完成させることができました。同じテーブルには、江戸のレシピを現代に活かす取り組みをされている方がいて、当館のデータベースの需要の一端を知ることができました。



右上から時計回りに  
冷し卵羊羹(江戸版)  
冷し卵羊羹(現代版)  
牛蒡餅(現代版)  
牛蒡餅(江戸版)

集中を切らすことなく、午後の和本づくりワークショップに突入。皆さん和本のかたちに興味津々で、終了間際までテーブルに並べられた複製本（一部、本物）を手に取りながら、江戸文化を追体験する一日を終えました。

今回は予想を超える募集があり、申し訳ありませんが抽選とさせていただきました。子どもから大人まで、幅広い世代の方々にご参加をいただき、篤く御礼申し上げます。（糸 汐里）

## マレガ文書解読のためのくずし字教材・教授法の開発と交流

国文学研究資料館が担当する人間文化研究機構の共同研究「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用」では、現在、現地で作成したデジタル画像を用いて目録記述と、画像データベースの構築を進めていますが、とくに多言語化と資料群の構造化が重要となっています。世界的な利用を前提にするため、日本語表記を基本とするにしても一定の英語表記が欠かせませんが、全体数は1万4000件を超えるため、限定しても日本語記述の英語翻訳を短期に行うことは困難な状況です。このため史料群の階層構造を分析し、たとえば、日本語であれば宗門方役所一踏絵一百姓などと史料箇々に示し、この階層を英訳する方法を採用しました。この場合は、宗門方役所に発生した踏絵に関する百姓についての文書であることを示します。端的にはアーカイブズ学に基づく資料群構造を英語並記で示す方法を採用したことになります。

これによって海外利用者による情報検索のハードルは幾分低くなると思われませんが、より大きな問題はくずし字の解読です。バチカン図書館を身近に利用できるイタリアの場合、日本学科を有する大学でもくずし字教育が十分に実施されていません。このため、プロジェクトでは以前よりローマ大学・ナポリ東洋大学などと連携して、広く欧州に呼びかけくずし字解読のための講義を行うと同時に、授業法および教材の開発を進めてきました。2019年12月9日・10日、ローマ大学サピエンツァを会場に開催されたくずし字解読の講義では、予めくずし字解読のための教材を準備し、それをもとにプロジェクト・メンバーでもあるローマ大学教員ルカ・ミラジ氏が大学院生などに事前に講義を行い、開催当日にはメンバーの太田尚宏・櫻井成昭氏などとともにプログラムを進める教授法が導入され、参加者から好評を博しました。これまで工夫を重ねてきた成果といえますが、2019年度はこのプログラムと関連させて若手リーダー育成を目的に、4名を大分に迎え、5日間の研修プログラムを県立先哲史料館の協力によって開催しました。イタリアでくずし字解読に参加し、現在、日本に留学する若手などが中心になりましたが、ナポリ東洋大学・ローマ大学との連携の成果です。マレガ収集切支丹関係文書を活用した新たな交流がおおいに期待されます。（大友 一雄）

## 小林健二名誉教授、観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞！

当館の小林健二名誉教授が、第41回観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞されました。本賞は、観世流の能役者である観世寿夫氏の能界・劇界における業績を記念して、遺族からの寄金に基づき法政大学が設定した伝統ある賞で、顕著な業績や舞台成果を示した研究者・評論家・能役者など、能楽の普及に貢献した個人・団体に贈られるものです。2019年度は小林名誉教授とともに、狂言方大蔵流山本則俊氏が受賞され、同日発表の第29回催花賞には、シテ方金剛流宇高通成氏が選ばれました。

小林名誉教授は、能楽と絵画資料の関係という独自に開拓された領域横断的な視点に立って研究を深化させており、その成果の一端として、2019年2月に『描かれた能楽 芸能と絵画が織りなす文化史』（吉川弘文館）を上梓されました。本書は、中近世の絵巻・絵本・屏風・絵鑑などの資料的価値とその物語



絵としての文芸的価値に着目し、能楽の絵画的展開を明らかにするとともに、視覚芸術として影響を与え合った相互の受容の過程を豊富な図版を交えて探求したもので、学界で極めて高い評価を得ており、この度の受賞となりました。

贈呈式は2020年1月20日（月）にハイアットリージェンシー東京にて開催されました。各受賞者に関わりの深い方々が駆けつけ、和やかな雰囲気のもと表彰が行われ、各受賞者によるスピーチがあり、能楽の更なる発展を感じさせつつ、盛況のうちに終了しました。

（慶應義塾大学准教授 恋田 知子）

### 一冊対談集 クリエーターと語るこの国の古典と現代 第3回 小倉ヒラク×ロバート キャンベル「酒は百味、人面のごとし」

2020年1月31日、東京都福生市にある石川酒造にて、「ぶらっとこくぶんけん」の企画である「一冊対談集 クリエーターと語るこの国の古典と現代」を開催しました。この企画はロバート キャンベル館長と様々なクリエイターの方々が古典文学をテーマに対談をするというものです。今回は「酒は百味、人面のごとし」と題して、発酵クリエイターの小倉ヒラクさんに登場して頂きました。小倉ヒラクさんは「発酵」をテーマに多彩な活動をしており、唯一無二の「発酵デザイナー」という肩書きで活躍しています。会場の石川酒造は、幕末の文久3年（1863）創業で、対談は明治30年（1897）に建てられた国登録有形文化財「新蔵」を借りて行われました。

今回の対談の前には参加者全員で石川酒造の酒蔵見学とともに銘酒「多満自慢」を味わいました。そして、ほろ酔いの、ちょっと心地よい気持ちの中で、館長と小倉さんとのクロストークが始まりました。対談では、100種類もの豆腐料理を扱った古典作品『豆腐百珍』（1782年出版）など料理や酒造り、味噌などの発酵食品を描いた文学作品を「つまみ」に興味深い話が次々と飛び出し、古典の面白さ、発酵の面白さに一同引き込まれていったものと思われます。なお、『豆腐百珍』は、当館のホームページ「電子資料館」のうち「新日本古典籍総合データベース」で画像を見ることができます。

この対談の詳細は『中央公論』2020年6月号（5月8日発売）に掲載されていますので、ぜひお読み頂きたいと思います。最後に、おいしいお酒と会場をご提供頂いた石川酒造の皆さまに御礼申し上げます。

（西村 慎太郎）



### 令和元年度くずし字講座

年も改まり、皆様からご希望が多かった恒例のくずし字講座を、各回30数名の受講者をお迎えし、開講いたしました。昨年度は例年とは異なり、通常展示「書物で見る 日本古典文学史」を観覧したのち、展示室にある書物を実際にくずし字で読むという内容に変更しました。

第一回の1月23日（木）は木越俊介准教授の担当です。前半は弘前大学ほか諸機関との共同研究の成果である「津軽デジタル風土記 ねぶた 見送り絵りブート！～デジタルアーカイブからよみがえる北斎の女たち～」展示解説が行われました。この展示に関連して配布されたねぶた絵の絵ハガキ（無料）は、わずか数日で無くなるほどの人気ぶり。当日はねぶた絵画家である川村岩山氏をお招きし、貴重な制作秘話をうかがいながら、色鮮やかなねぶた絵を鑑賞しました。後半のくずし字講座では、江戸後期の見立番付を参加者が順番に翻刻し、短い時間ながらも緊張感あふれる講座となりました。



第二回は2月20日(木)に筆者が担当し、『宇治拾遺物語』第48話「雀報恩の事」を解説しました。前回よりも長い文章を課題とし、文脈を理解の助けとしながら、読みなれない文字も翻字できるようにする試みです。物足りない方には応用編も配布し、くずし字初級者から上級者まで、それぞれの習熟度に合わせた内容で進めることができました。

当初は全三回の予定でしたが、第三回3月19日(木)の講座(担当は恋田知子准教授)は、新型コロナウイルスの流行により、中止とさせていただきます。受講を予定されていた方にはご迷惑をおかけし、まことに申し訳ありませんでした。再びくずし字講座を開講できるよう、一日も早い流行の収束を願うばかりです。

(糸 汐里)



## シンポジウム

### 「文学と化学分析から見た、日本の食文化における断絶と継承—古代、江戸から現代まで—」

芥川龍之介の『芋粥』(1916年)という短編小説を読んだことのある方は多いことでしょう。では、題名にもなっている〈芋粥〉はご存じですか。多くの方は米をたくさん水分で炊いた〈お粥〉に小さく切ったサツマイモが入っているものを思い浮かべるのではないのでしょうか。少し塩で味付けをしたものを実際に食べた人もいます。私は小説の読後、長い間〈芋粥〉を上記のようなものと思い込んでいました。

しかし、実は全く違うものだったのです。芥川は『宇治拾遺物語』(13世紀)に取材し、その製造の過程を詳細に描写しています。〈ヤマノイモ〉(自然薯)を細かく切って〈甘葛煎〉で煮たものだったのです。米は入っていません。高校生のころに読んだのですが、その当時は細かいことは気にしないで読み飛ばしていたのだらうと思われる。それも、身近にサツマイモの〈芋粥〉があったために、そちらに引き付けて読んでいたのです。ここに一つ食に関する断絶があります。

もう一つの断絶は〈甘葛煎〉です。こちらは知らない方も多くでしょう。言葉は知っていても、味はほとんど知られていないと思われる。古代の甘味料で、室町時代の中頃には途絶えてしまいました。その原因は、大量の砂糖が輸入されるようになったからです。甘味料としての地位を砂糖にうばわれたのです。そのため、江戸時代にはその製法を含め、幻の甘味料となっていました。江戸時代後期になると、どのようなものであったかを考証する人びとがあらわれます。

神松幸弘さんの研究の特徴は、実地の採集と化学的分析から、もう一度原料を見直してみようとするところにあります。神松さんによると、例えばその原料が〈サトウキビ〉(甘蔗糖)であっても〈サトウダイコン〉(甜菜糖)であっても、〈砂糖〉と呼んでいるのと同じだということです。ツタとだけ考えられている〈甘葛煎〉の原料も、いろいろな植物だったのではないかというわけです。そこで、さまざまな植物からその樹液を採集し、成分を化学的に分析しました。結果、ツタ以外のノブドウ、ヤマブドウ、アマヅル、サンカクヅルのいずれの植物からも甘味料は作成できることがわかりました。品質としてはツタが優れているようですが、生産効率や資源の持続可能性の観点から考えれば、ツタだけから作成されたとは考えにくいとの結論に至りました。

今回は更に、神松さんが採集して生成した〈甘葛煎〉を用いた〈芋粥〉を再現して試食をしてみました。古典籍に基づいて、できるかぎり平安時代のものに近づくように工夫したものです。神松さんがこだわったのは、特に〈提子〉から注いだという点。〈提子〉とは、結婚式の三三九度の杯のときに酒を注ぐ容器と言えわかりやすいでしょうか。液体を注ぐものです。古典籍には、ヤマノイモを「切る」とは書いていますが、「摺りおろす」というような記述はありません。〈提子〉から注ぐようにするには、どの程度に切るべきかが難しかったようです。京都で料理屋「くいしんぼ」を営んでいる西謙造さんにご協力いただき、何度も試作を繰り返したとのこと。それともう一品、豆乳を加えて柚子の風味を付けたものを試食しました。さっぱりとした甘みを持ち、大変上品なもので、召し上がっていただいた来場の方々にも大変好評でした。

当日、もう一つ研究発表がありました。これも食に関するものですが、従来の研究とは全く異なった手法のもの。それは、古典籍に漉き込まれている毛髪から当時の人びとの食生活を探ろうというものです。

神松さんと雑談しているとき、髪の毛が6センチくらいあると、窒素の同位体分析によってその人が食べていたものの特徴がわかるということを知りました。それなら、江戸時代の本の表紙裏に使われている漉き返しの紙(再生紙)に漉き

込まれている毛髪が結構あると話したところから、丸山敦さんとの共同研究が始まりました。最初は22点のパイロット調査で、この分析はすでにイギリスの学術雑誌に発表しています。その成果をうけ、2019年度には龍谷大学大宮図書館の蔵書のなかから、362点の古典籍から毛髪を採集し分析しました。今回、丸山さんは都合により出席できなくなりましたが、甘葛の試食の手伝いをお願いしていた木村俊太郎さんと桑木捷汰さんは、卒業論文で龍谷大学の蔵書の分析にあたっていましたので、急遽お二人に発表していただきました。

江戸時代は現代に比べて海産魚に対する依存の割合が高く、江戸時代を通じてだんだんその割合が高くなっていること、江戸の方が上方（京都・大阪）よりも粟や稗を食べる割合が高く、時代が下るにつれて米の割合が高くなることなどがわかっています。

これまでの異分野融合研究は、古典籍に書かれている内容から情報を採し出すことが中心でしたが、ここに物質としての古典籍そのものから情報を取り出す研究が始まったわけです。神松さん、丸山さんとはまだいろいろなアイデアを出し合っているところです。今後の研究にご注目ください。（入口 敦志）

#### 【プログラム】2月8日（土）国文学研究資料館・オリエンテーションルーム

- ・食の断絶と継承 入口敦志（国文学研究資料館）
- ・古書籍から毛髪を抜きだして、江戸時代の食生活を科学する 丸山敦（龍谷大学理工学部）
  - ※当日は、丸山さんの都合が悪くなったため、学生の木村俊太郎さんと桑木捷汰さんがスライドを用いて発表した。
- ・甘葛煎を使った芋粥の試食—古代式 vs 現代流の食べ比べ—
- ・古代の甘味料甘葛煎の復元 神松幸弘（立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構）
- ・総合討論 司会 宮本祐規子（国文学研究資料館）

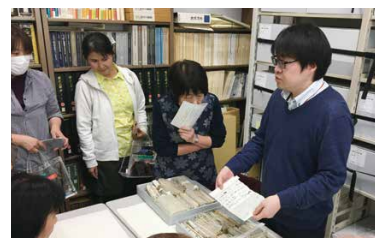
### 基幹研究「地方協創によるアーカイブズ保全・活用システム構築に関する研究」

2019年度から国文学研究資料館基幹研究「地方協創によるアーカイブズ保全・活用システム構築に関する研究」（研究代表者・西村慎太郎）がスタートしました。これは「地域住民が自律的に地域アーカイブズを継承・活用し、研究者がそれをサポートし、さらにその過程から研究者が新たな学術的研究課題を追及するという協創関係を構築し、全国的に参照される事例とすること」を目的としたものです。長野県北部を主な対象として、地元住民や学芸員の方がたなどと共同で地域歴史資料や地域アーカイブズの継承のあり方を進めました。

これまでの活動や研究会の資料は、当館ホームページに掲載されています。インターネットにて「国文研 地方協創」で検索するか、下のQRコードを読み込んでください。また、1週間に1回のペースで公式Facebookを更新し、活動内容や史料の紹介を行っておりますので、こちらもご覧ください。昨年度は地域の方がたと古文書を読んで史料目録を作ったり、報告会を行ったりすることを目指しましたが、台風19号の被害、新型コロナウイルス感染症などのために活動やイベントの中止が相次いでしまいました。ただ、長野市立博物館や信州資料ネット、地元ボランティアに協力して、台風19号で被災した歴史資料の保全活動を行いました。

調査は既述の台風19号被災資料だけでなく、当館蔵八田家文書や真田宝物館蔵真田家文書について進めました。その成果の一端は当館の『史料目録』として3月に刊行しました。

研究は2021年度までの予定となっていますが、地域の方がたとともに歴史資料の継承と活用をどのように構築していくか検討していきたいと思えます。（西村 慎太郎）



## 総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

### 令和元年度第2回特別講義を開催

2020年3月、国文学研究資料館にて令和元年度2回目の特別講義を開催しました。当専攻の恋田知子准教授（現 慶應義塾大学准教授）と谷川恵一教授が講師を務めました。

恋田准教授は「17世紀の物語絵の諸相—『大織冠』を例として—」をテーマに、大海原を舞台に藤原鎌足と竜王の宝珠をめぐる争奪戦を描いた幸若舞曲『大織冠』の古活字本、整版本、奈良絵本、絵巻、屏風絵などを書写年代を追って紹介し、挿絵数や挿絵の特徴を解説。参加者は国内外の貴重な古典籍の画像に見入りながら、興味深そうに耳を傾けていました。



恋田知子准教授（当時）



谷川恵一教授

一方、「<私>の言説戦略—アイロニーの日本近代—」をテーマに講義を行った谷川教授は、3月末に定年退職を迎え、今回が最終講義となりました。文体の変容から言葉や事柄がどのように生まれ、増加していくのかを分析するこれまでの研究の一端を紹介しながら、その中でも内面と外側が乖離した様相「アイロニー」に焦点を当て、日本近代の文学者たちがどのようにアイロニーを理解していたかを考察。テキストの緻密な分析に基づく発表に、会場からは、近代文学における内面表現について各自の研究対象に引き寄せて掘り下げた質問が数多く寄せられました。講義を終えた恋田准教授と谷川教授には、教員や学生から花束が贈られ、会場は大きな拍手で包まれました。

この特別講義は当専攻が学生の専門性を高めると同時に、広く深く教養と知識を身につけ先進的な日本文学研究を行う優秀な人材を育てていくことを目的として、日常の授業では触れられない角度からテーマを設定して毎年開催しています。

今回の開催にあたっては、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、不特定多数の方との接触を避けるため、一般の方の参加はご遠慮いただき、関係者のみの開催といたしました。ご理解、ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

### 日本文学研究専攻に新入生を迎えました

日本文学研究専攻に2名の入学生を迎えました。今年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響をうけ、入学式やオリエンテーションは中止となりましたが、授業開始後にお会いできることを楽しみにしています。

日本文学研究専攻は、教員20余名が広範な教育研究分野から学生をサポートしており、学生一人に対して3人の教員によるきめこまやかな論文指導を行っています。

さらに、研究活動の旅費等の支援やリサーチ・アシスタント（RA）への積極的な雇用、希望する図書の購入など、さまざまな経済的支援を行っています。このような環境のもと、充実した研究生活を送られることを願っています。



### 古明地 樹さん、全国大学国語国文学会 文学・語学賞を受賞

2020年4月30日、日本文学研究専攻の古明地 樹さんに全国大学国語国文学会から文学・語学賞が授与されました。対象となったのは、機関誌『文学・語学』第226号に投稿された論文「橘守国の絵手本作品における画題の和漢分類意識—レイアウトを起点に一—」です。おめでとうございます。

#### 【古明地さんのコメント】

栄誉ある賞を賜り、誠に光栄です。手法の新規性を評価して頂いた本論文ですが、この研究は指導教員の山下則子先生をはじめ、多くの先生方のご指導に支えられたものです。改めて御礼申し上げます。一層邁進し、今後の研究に取り組んで参りたいと思います。

## 当館データベースのご案内

当館ウェブサイトの「電子資料館」では、日本文学のみならず色々な分野の古典籍画像をダウンロードできる新日本古典籍総合データベースなど、様々なデータベースを公開しています。また、「古典籍画像を使う」では、国語、日本史の授業に使える画像の紹介も行っています。ぜひご活用ください。

▶ 電子資料館 <https://www.nijl.ac.jp/search-find/#database>

▶ 古典籍画像を使う <https://www.nijl.ac.jp/koten/image/>



## YouTube チャンネルのご案内

当館館長 ロバート キャンベルから皆様へのメッセージを動画にした「日本古典と感染症」などを公開しています。ぜひ、チャンネル登録をお願いします。

▶ [https://www.youtube.com/channel/UComv2mV\\_I1JKz9H690ST-7w/featured](https://www.youtube.com/channel/UComv2mV_I1JKz9H690ST-7w/featured)



## 表紙絵資料紹介

『富樫』〔江戸前期〕写。上巻、天地16.7×全長646.9cm。下巻、天地16.9×全長873.3cm。

受入時の書名は「判官奥州落絵詞」であるが、本書は幸若舞曲『富樫』（別名『安宅』『勸進帳』とも）を、奈良絵本に仕立てたものである。外題なし。表紙、紺地に金泥で霞、雲、萩。見返し、金銀切箔散。料紙、斐紙。碧洋白由甚五郎文庫蔵。内容は、以下の通り。

都を追われた義経一行が山伏に姿を変えて加賀国安宅を通過しようとする時、当地の富樫が幕府の触れ状によって山伏禁制を敷き、道行く山伏たちを悉く斬首に処していた。弁慶は単独で富樫の城に乗り込み、執拗な追及を持ち前の巧みな弁舌で交わすが、疑いは晴れない。遂に自らを南都の勸進僧と偽り、忽然と現れた往來の巻物を勸進帳のごとく読み上げ、窮地を脱したのであった。表紙に掲げたのは、歌舞伎でも馴染み深い、弁慶が勸進帳を読み上げる場面。

現在、絵巻に改装されているが、元は本紙29丁程度、本文14行の半紙型の横型奈良絵本であったとみられる。挿絵は10図確認でき、元は9図が半丁で、第5図のみ見開きであったか。本文系統は大頭系の中でも大頭左兵衛本系に属すとみられるが、中でも京大杉原本（16冊17番、外題「勸進帳」、寛永五年〈1628〉写）に最も近い。現存する『富樫』の奈良絵本は、海が見える杜美術館が所蔵する寛文・延宝頃成立の縦型奈良絵本が知られるのみである。また舞の本を元に作られた奈良絵本が主流である中、本書のように版本に属さない本文系統の作例は珍しい。幸若舞曲を題材とした奈良絵本の本文研究において、貴重な一本となろう。（糸 汐里）



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
**国文学研究資料館**  
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3  
Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

国文研ニュースNo.57  
発行日 令和2年6月22日  
編集 国文学研究資料館 企画広報室  
製作 株式会社 アズディップ  
©人間文化研究機構国文学研究資料館